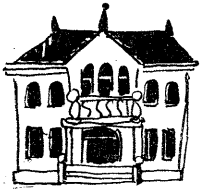
——全国私立幼稚園教育研究大会から——

確かに希望がある



武南高志

昭和廿九年七月現在、文部省の調査によるわが国における私立幼稚園の総数は二八三二を示し、これを昭和廿二年四月卅日現在の七八九に較べると三・五倍に達している。その内二三八〇、即ち全体の八四％にあたるものが日本私立幼稚園連合会に加盟しているのである。これは戦後、私立幼稚園に対する認識が一般社会から漸く高まって来たのと相まって、内においては幼稚園自らが、私立学校としての体制を次第に調えて来て、これが各個バラバラでは、何事を実行しようとしても力が足らないし、また多数の盛り上る力によって、その改善向上を計らなければ、それは達成されないとの要望から、その組織体が強化されて来たことを示すものであるといえる。

同連合会は昭和廿八年五月十八、十九の両日、愛知県犬山町において、第六回総会を開いたが、この際、各都道府県団体提出議案のうち、次のような議題が期せずして三カ所から提出された。

幼稚園大会開催に関する件（本部）

私立幼稚園教職員大会開催の件（東京都）

私立幼稚園大会開催の件（静岡県）

その提案理由に多少の相違はあったが、全国の同労者が一堂に会して刻下の諸問題について検討をしようということについては、いずれも共通したところであった。

このような声が起って来たというのも、戦後の混乱時代を経過して、漸く安定の域に入った社会情勢の中にある幼稚園自体を自己反省の余裕をもつに至り、幼稚園教育にかけられたる社会の期待に対して、互に研究検討をしてその向上に資したいという願いが、その底にあったからであるということができよう。同総会は三案を一括して可決、その第一回を昭和廿九年、大分県で開催することに決

定した。

かくして、大会開催については、廿九年に入ると直ちに準備に着手し、その結果廿九年七月卅、卅一の両日、別府と大分の両市で開催することゝなり、各県を全国私立幼稚園研究大会とした。連合会はその前日の廿九日、別府市において第七回総会を開き事業執告、役員改選、議案審議をしたが当日の出席者卅二都道府県より百五十八名の評議員が参集、これまた同会初まって以来の盛会であった。

研究大会には約千五百名の出席者があったが、その八〇%は九州地区以外からの来会者であった、もってこの会が全国私立幼稚園教職員に期待されていたかが知れるであろう。大会は羽仁説子、山下俊郎の両氏の講演の後二つの分科会に分れて研究協議がされたのであった。

第一分科は「教育内容に関するもの」十三項、第二分科は「経営管理に関するもの」十項、この二つの会を通じて表されたことについては次のようなことがいえるのでなかろうか。

教育内容に類するものとして（一）小学校教育及び小学校との関係、連絡をどうするかということ。即ち幼稚園と小学校の間のギャップを、どのような考えと方法をもって埋めて行ったらよいか、ということである。これに関する協議題としては

一、幼稚園教育を小学校教育の芽生期と思考することの如何（山口県）

二、小学校低学年と幼稚園との教育課程の限界は如何にあるべきか（香川県）

三、教育効果をはかるため幼稚園と小学校との連絡提携の具体的方法如何（和歌山県）

というのであった。但しこの種の問題は昨今に始まったことではなく、むしろいい古されたことでさえあるが、しかも今なお未解決の問題である。その原因として挙げられるものには、小学校側の幼稚園軽視、時としては否定、小学校教師の幼児教育に対する無理解。また幼稚園側としては正常な幼児教育の場となっていない、いわゆる準備教育的なもの、小学校に対して積極的働きかけの欠如、などのこともいえよう。

これを未解決のままおくことは、折角幼稚園の教育をされていながら、却てそれがため小学校で問題を生ずるということになり、不幸この上ないことである。もっともここに挙げられたことは、その一部に限られたことであるが、然しこの点いろいろな方面から是正を計り、幼稚園本来の教育目的である「適当な環境を与えてその心身の発達を助長する」場所としなければならぬと同時に、積極的に小学校側に働きかけて、その連絡を図るべきである。

それとともに、協議題二にもあるように、小学校低学年と幼稚園との教育課程の限界をどこにおくべきか、即ち幼稚園から小学校へ導入されるに、どのような途をたどるべきかを今少しく明らかにしたいというのである、例えば文字や数の扱い方にしても、幼稚園では教えてはならないといわれるが、然し現実としては幼児はすでに文字や数の生活をしている、それならば小学校のように教えないまでも、それを如何に導くべきか、またどの程度それに触れてよいか、その限界を知って、

なだらかに両者の渡りをつけるべきではないか、というにある。

これは一例に過ぎないが、このように幼稚園と小学校低学年との関係が問題になった。羽仁説子氏は大会最後の感想の時間に、「私はむしろ小学校低学年を幼稚園につけた方がよいと思います」という意味の発言があったが、ここまで来ると詰るところは新学年令の低下、即ち現在の幼稚園をも含めての幼小学校というようなものが、理想的な姿であるということになろうが、然しこれはまた「幼児」という点から見て問題が残るであろう。それ故に、現在においてはこの両者が共同研究の如き形において、相携えて探究してその解決をはかり、幼稚園教育が小学校で生きるように努力を払うべきではあるまいか。

（二）カリキュラム、（三）視聴覚教育、（四）健康教育、（五）平和教育、（六）母親教育、家庭教育との関係。

カリキュラムがどのように編成されているか。それぞれの特殊性を生かすため如何ように取り入れるか。原理と実際の両面から考えられたのであった。また視聴覚教育にしても健康教育にしても、平和教育にしても、いわゆる一時のはやりであってはならぬ。放送設備をしたがその当初だけで、あとは殆んど利用しないというのでは宝の持ちぐされであって、その原因はどこにあるか、どのような点を改善しなければならぬかを究めなければならぬ。このようなことから、研究所をつくれという声が挙った、日私幼連が常設の幼児教育研究所を設けて、そこで常に幼稚園の教育について研究するようにしなければ、折角の研究も断片的に終るというのであった。これに対して一部の考え方には、研究所設立は結構なことであるが、連合会がこれに当るのは適当でない、連合会はどこまでも地方私幼協の連合体であって、それがこのような事業をすることは組職の上からも、またその経費の上からも不可能である、それよりも各地方においてなされた研究の成果を持ち寄って発表し合うことがよい、という設もあった。然しこれも大都市所在地ではできようが、そうでないところではどうであろうか。いづれにしても日私幼が過去六年間、教育内容の研究という点に触れることができないほど、外側の体制処理に追われていたものが、こゝに研究を取り上げ、その端を発したことは喜ぶべきであって、今後この中からわが国幼稚園教育に寄与する研究が続出することであろう。

第二分科で協議されたことは（一）共済組合に関する問題（二）適正配置（三）無認可のものに対する措置（四）学校法人関係（五）設置基準に関する諸問題（六）定員と収容力との関係、などに分類することができる。

現在わが国の三才～五才の幼児の推定数に比して、幼稚園の収容能力は七％、就学すべき幼児だけからみても一七％、（うち私立は九％）ということであって、幼児教育の必要性からいって、なお多くの幼稚園の設立がされなければならぬことは、この数字からみても当然のことである。然しそれだからといって無計画に、自由企業的に、どこでも構わずに既設のものゝすぐ近くに新設されるというようなことは健全なやり方ではない。この点は公立をも含めて適正に配置さるべきであ

る。未開拓のところにこそ続々と設置してほしいのであって、敢えて既設の中に割り込んで摩擦を生じさせるは賢明なことではない。その一方、園数の不足から応募者の収容に応じ切れないところもあり、そこから生ずる諸種の問題、また超定員の収容から、設備の不十分がもたらす教育効果の削減などの場合もある。

そういう意味から適当な設置基準を守ることの必要がある。然しここで考えらるべきは幼稚園として最も教育的効果を挙げようとするには、どの程度のものを理想とするかということである。果して三四百名も収容するのがよいか、またはかつていわれたように百人内外の員数がよいか、仮に大幼稚園主義と小幼稚園主義というような言を使えば、いずれを採るべきか、十分に研究さるべきである。小幼稚園が幼児の歩ける範囲に幾つもあった方がよいか。または大幼稚園として一カ所に集めた方がよいか。という問題であって、そこに現行設置基準の再検討がこの会でも取り上げられた。

また第一でも、第二でも地域社会と幼稚園との関係、例えば地域社会の教育における幼稚園とか、地域社会の要望と幼稚園という言い方がされた協議題があったが、ここにもまた幼稚園の特殊性があるといえる、その反面社会教育的の面を幼稚園が担っているかの感がする。

以上が、この大会において表われたものに私見を加えての感想ともいうべきであるが、何はともあれ、全国の私立幼稚園がその量におけると同様、その質においても十分にすぐれたものをもち、その持ち前の特徴を生かしてわが国の幼児教育に当るためには、今までその体制を調えるに多大の苦心を経て来たと同じように、その教育内容についても一層の関心をもち、しかもそれが個人的に分散することなく、いわゆる力を合せて伸びてゆかなくてはならぬ。この大会はこのために確かに一石を投じたといえよう、その波紋は今後また新なものを生み出すことゝ思っている。

☆幼児教育界におくる
倉橋惣三先生の二著！
幼稚園真諦
B六判一四六頁定価一八〇円
子供讃歌
B六判二三四頁定価二六〇円
倉橋惣三先生が、永年に亘り考究された幼児保育の真のあり方を、体験によるうらづけと、先生の美しい心のままに、平明に描かれた書で、幼児教育にたずさわる先生方が、必ず一度はお読みになって、ほんとうの意味の幼稚園の理解と、倉橋先生のりっぱな児童観を、会得していただきたいと思います。
株式会社　フレーベル館